子どもの育ちに関する実践的研究 —保育者の位置について—

永倉みゆき
（静岡大学大学院）

一はじめに—
保育に携わる者は、家庭生活においては、親権や
周りの人々、幼稚園や保育園においては、担がる保育
者、観察者、実習をともに、様々な立場があり、他の
子供も保護者への関わり方がある。それぞれの場に
いて、見えた、感じられた、子どもの姿を、
のぞきながら厳しくなっていくと、思われる。ここでは
私が、保育のつままで、またの関わり方、保育の
保育者の立場に立ち、時をこえて、私自身の、子どもの
何が何時も意識の変化から、担わされ、
た時に、子ども達との関わりについて、と
んなものである、を考えてみようと思う。

その実際—
①私の立場
昭和52年度まで、静岡県静岡市に勤め、現在の
保育園そば保育園に勤め、現在の
保育園そば保育園28名（3年保育員11名、2年保育員
11名の保育園）を、小中、多年と2年間受け持て
いた。63年度より、内地留学生として静岡に移籍し
つつ、週2回（1日・1日）のみ、主に保育園の保育に
関与的に（1日停学）という意味で関与する。
②幼稚園の保育状態
保育園の保育計画のもとに、「保育員2クラス5名、
保育員2クラス5名、保育員2クラス5名、計132名
の子どもたちが、国内の楽しい場で、入るらじ
て遊ぶ。保育園の保育者に限らず、どの保育者でも、
保育者の限らず、園長や事務の先生等が、子どもたち
と自由に関わる体制、家庭気がある。
③経験
次に、保育中に私が感じた、他者の時と違った、感
じ目の、感深さなどを述べる。なお、この記録は、日々の
保育記録から摘出した。

1) のぞきみ、おお、おあきのと、おとこの少しい前に、
砂場を出して遊ぶ。（この場所は、年長の部屋か
ら見えない、年少の部屋に近い。）ひとしき
り遊んで、その後、こちらからも、面白くなる、と
いう時に、「おやつだよ」と呼び声がする。3人
は、「おやつだよ」と言って、パリと駆け出すが、一
瞬「片付こう」と声をかけようかと、遅らし
ようと片付けようと言うのには、余りにも多くの
物が、出てしまい、まだこれから遊びを何個も
するようにも思える。しかし、もう始かないのだと
したら、場所的にも、片付けを忘れてしまうかも
知れない。また片付けにしても、どこかで、い
いに片付けたものか… 私は（見通しを立て
られる、わからない）と思う思いがした。（4月）

2) （毎週、てんに、クラスの子全員が、部屋が
無言、保育者の話も絶えを教わらない）ゲームを
したりする、ひとときを持ち。私にも、そのひと
ときを担当させてもらうことがあった。この時と
は、1日の生活の中で、プラス遊びを、たわけや、
けんかをして遊んでいる様、遊び込むことができ
ずに、いろいろしている様に、様々な思いを
揺らす様が、一同に合っている、そんな場面での来
事である）

絶対に読んでいると、ついつい、おみや、かか
り、うずらうしたが、後の方で、夢で何か、
相談している。その子が、そんなには、気
にもない子を、熱心に絶対に見ている
だんだん心が大きくなり、顔が、ちらりと見
ると、ときと、ことと声をかけるべきか、遅ら
それ「ひとてことが、みんなが、お話の世界を、 дизайн
してしまうからしない。それにして、何を、そ
なたが夢中になって、話しているのか。一体、今日の
保育の中で、何に住め、ため、それを知らない私は
には、声をかける自信もない。ただの“注意”に
なっててしまうような気がする。（1月）
だちとつながる。かけると、久滞させてしまうことにもなりかねない。週2日だけの関心の中での、どんな受けも証をししていないか。（5月）（また、別には、進む気持ちはまま、一日中つながるが、このことが気になって、離れかみない）

4) きっかけみつこ。岩かよこ。江本透と、お前

でをやる。きっかけは、きっかけ。さらに交わる

のを集めた。高く笑いの笑いに。コツッ水をつけて、かんのふたに油を。そこで上をか

けると、砂時計のように、順番に進んでいると

ようすは、めずもやってて、盛り上がる。

しかし、お弁当の後から始まった遊びの中で、すっ

ぐに、舞の時間になってしまう。きっかけは、残念

そうにするが、「また。あした、やろう」と、と思

い切ると前に片付けを始める。「また。いつか

『いよいよ』というのだから、ふと私を見て、心

擬そうに、「先生、あしたも来られる」と声を。

(9月)

②考察

1)～4) において、気持ち私の思いは、つねになって

いない。ゆえの「かからなさ」である。1) とは、片付け

という一つの行為を、かつては、保育の一日の流れ

の中で、捉えていた自分に気づけ、初めであり、たのは

一つ一つの節を、の日のひとつの、あるいは、ということを見通しのあると、行なってきたとえる。それ

は、②においては、つまりの「表の流れの中で

の今」という考え方のが基礎になったため、その後でど

う動いただいか、迷っている。いる。

3) においては、人の、不変なふたを、受け入

れたい、という気持ちにはながら、どう見せた

ようにも受け入れることが、いいのか。おおらかに感じてしま

う。相対していた頃には、もちろん、こういう事は

あったが、その時には、一ヶ月遅すぎと決した時も

反対の方へ返そうとしたもの。今日はさらにいつか

いうをするが、その気では、こうしたい、という意見

しか PSG 深い町で、そのうの生き方を、一瞬に支

えようとする構えが、あったのだと思う。一日よりさ

らに長見え通し。そのうのいる状態の把握。受け

入れようとする気持ちの束にある。これに、わから

るから。進む。いうのも、今日までの生活のあ

る上で生まれる。明日へつながっていく安心感の中に

存在していたが、わかる。具体的に、いくえが、

と。「あした、やろう」「あしたも、これる」

という結言の中にあたした。年長児からこそ、理

解し得る実際のためである。だが、遊びが実際

に、明日行なわれる、という意味に限らず、この遊び

が、きっとやれる、という。いつもの仲間とい

うの場で、保育国の生活において保障されている

という安心感。保育の場には必要なのだ。明日

には、関わらみかもしれないし、という気持ちを抱

つ私。自分、子どもたちの生活の場に、こそせめてな

く、 dean のである。

·まとめて

このような、年間で減る。私の「子どもたちとし

っきりしない感じ。」「子どもたちの生活から離れて

いる感じ」は、主に

・クラスの反対関係の中で、その子の位置が、捉

えられない。

・一日、減る。は一年中一年見通しの中で、今、とい

う考え方、逆に絡まないように。

ということに起因して、ように思われる。担任があ

った時、それもない時の行動の仕方、外見的には、

さほど変わらないが、一つ一つの出来事、受け止め

に、大きさ違いがあった。

これは、単に重なりの違いではなく、共に生活をつ

くるものとしての一体感の状態にとどまらないと

思う。この重なり一体感とは、例えは幼児と子供が「見

えないか」のような、とあうしている。「強く絡められ

ているのではなく、応和し合っているような関係」の

ことである。自然な心の保育では、より、保育者と子

ともとの内面的ななかであり、重視され、かつ次めな

れるように思う。一見、保育者と何かの関わりもなくて

進んでいるように見えることにもかかわらず、いかにかえって

見えない子を抱えれており、保育者は、子どもの動き

に補助的に関わっても、意識はその全体をおさ

ていることが、今、明らかにた。

今後は、更にどのようにして保育者と子どもたち

が形成されるかを、さらに探していきたい。

「人間成長としての保育研究」津田町石井雄、髙野

(光文堂)